

カッパドキアにおけるキリスト教聖堂群の  
文化資源的な活用に向けて

For Utilization of Christian Churches in Cappadocia as  
Cultural Resource

---

菅原裕文  
Hirofumi Sugawara



## カッパドキアにおけるキリスト教聖堂群の 文化資源的な活用に向けて

菅原裕文

金沢大学人文学類 准教授

h.suga0616@staff.kanazawa-u.ac.jp

Abstract. This paper considers the way of utilizing the rock-cut churches in Cappadocia as cultural resource. Though Cappadocia is a region of high importance where stylistic development of Byzantine art can be observed, it has hardly received treatment as much as its value. Cappadocian churches have been suffered not only from severe climatic conditions but also from vandalism, and they are still on the verge of disappearance. This paper introduces some of the activities that the author has worked on with the local guides in the field and proposes the concept of the virtual reality museum to utilize the rock-cut churches as cultural resource.

**Key Words:** Byzantine Art, Cappadocia, Rock-cut Churches, Cultural Resources, Virtual Reality

### 1. はじめに

トルコ、アナトリア高原中央に位置するカッパドキアは、ネヴシェヒル県、カイセリ県、ニード県、アクサライ県と四つの行政区にまたがり、おおよそ東京都と同等の広がりをもつ。トルコ周遊ツアーの宣伝等で言及される場合のカッパドキアは「ギョレメ国立公園およびカッパドキアの岩石遺跡群」の名称で UNESCO 世界遺産に複合遺産として登録されており、奇岩が織りなす幻想的な風景ゆえに、イスタンブールに次ぐトルコの観光名所として今なお多くの観光客を集めている。

カッパドキアという名は古代ペルシア語で「美しい馬の地」を意味するカトウパトゥクに由来する。その歴史は古く、遡ればヒッタイト、アケメネス朝ペルシア、ヘレニズム、ローマと様々な時代の遺物が発見されているが、中でもビザンティン帝国統治期に開削されたキリスト教の岩窟聖堂群が数多く残存する。伝聞によれば、その数はカッパドキア全土で1500を超え、壁画を有する聖堂だけでも300弱が確認さ

れている (Giovanni, 1971, pls. 1-6; Jolivet-Lévy, 2015)。

これら岩窟聖堂の体系的な研究は20世紀の前半にフランスのイエズス会士 G・ドゥ・ジェルファニオン神父により拓かれた (Jerphanion, 1925-1942)。彼は1925年から1942年にかけてそれまでの研究成果をまとめてテキスト4分冊、図版3冊に及ぶ大著を刊行し、今なお参照すべき基本文献となっている。ジェルファニオンは各地区の聖堂をナンバリングし、さらに初期(6世紀～9世紀後半)、アルカイック期(9世紀末～10世紀前半)、過渡期(10世紀後半11世紀初頭)、盛期(11世紀)、末期(12～13世紀)と独自の編年を構築した。本稿も基本的にはこの時代区分を踏襲する(ただし過渡期は後述のコストフにより付加された)。

カッパドキア研究が再開するのは1960年代のことである。ベルギーの J・ラフォンテーヌ＝ドゾーニュ (Lafontaine, 1958) やフランスの N・ティエリー (Thierry, 1963) は、ジェルファニオンの及ばなかったカッパドキア西部で調査を

敢行し、それまで学界に知られていなかった多くの岩窟聖堂を世に知らしめた。またドイツのM・レストレ (Restle, 1969) は首都コンスタンティノポリスで制作された写本挿絵等との比較を通してジェルファニオンの編年を再検討し、カッパドキアの岩窟聖堂の制作年代をおおよそ1世紀ほど引き下げている。カッパドキアの屋外博物館で掲示されているキャプションに記された年代に複数の年代表記、あるいは齟齬があるのはこのためである。

1980年代以降、カッパドキア研究は細分化の傾向を見せる。ジェルファニオンによる時代区分を再検討し、建築様式と聖堂装飾プログラムの変遷が相関関係にあることを指摘したS・コストフ (Kostov, 1989)、修道院複合体の発展を辿った建築史家L・ロドリゲス (Rodley, 1985)、カッパドキアの至宝とも言えるトカル・キリセの修復を担当したA・W・エプシュタイン (Epstein, 1986) が続いた。さらにN・テテリヤトニコフ (Teteriatnikov, 1996) は岩窟聖堂の内部空間について文字史料で裏付けつつ、その機能を明らかにしている。ティエリー夫人に師事したフランスのC・ジョリヴェ＝レヴィは250に及ぶ岩窟聖堂のアップシスをカタログ化した後、大部な単著と論集を発表した (Jolivet-Lévy, 1991)。彼女は2015年には『カッパドキア— G・ドゥ・ジェルファニオン以後の1世紀』を発表し、ジェルファニオン以後に発見された聖堂を所収している (Jolivet-Lévy, 2015)。

以上、図像学や聖堂装飾、パトロネジなどに関する個別的な論文については省略し、単著あるいは重要な報告に限ってカッパドキアの研究史を略述した。カッパドキアに残る岩窟聖堂のほとんどが聖像破壊論争 (826～943年) 以降の中期ビザンティン期 (9～12世紀) のものである。この時期になって初めて、ビザンティン帝国はローマ美術や初期キリスト教美術の影響を脱却し、ビザンティン独自の絵画様式や聖堂装飾プログラムを形成していく。ビザンティン様式の形成過程をつぶさに観察するにはイコノクラスム直後の9～10世紀の作例が重要になることは言うまでもない。しかし、その連続的な発展を詳細に辿れる地域は、旧ビザンティン帝国

の影響圏内ではカッパドキアにおいて他にないのである。

中世の当時、文化的先進国だったビザンティン帝国の美術がイタリア・ルネサンスの胎動を促したことはつとに知られている。カッパドキアで観察できるのはイタリア・ルネサンスの遠因となったマケドニア朝 (9世紀～11世紀中葉) の貴重な作例である。しかし、本章ではカッパドキア研究史の一部を紹介したが、一読しても分かるように、カッパドキア研究者の層は厚いとは言えず、研究も今だ裾野の状態にある。さらに言うならば、研究対象であるモニュメントそのものも必ずしも上述した美術史的な価値に見合うだけの扱いを受けているとは言いがたい。むしろ、カッパドキアの岩窟聖堂は今もなお自然的要因による消失や人為的要因による破壊の危機に瀕しているというのが実情である。

筆者はこれまで13年間カッパドキアで継続的にフィールドワークを行い、美術史的な研究を行ってきた。その調査の過程で訪れた先々で、中世キリスト教の岩窟聖堂が直面する数々の問題を目の当たりにしてきた。本稿ではこれまでの一美術史家という立場を離れ、カッパドキアの岩窟聖堂の文化資源的な活用に関して取り組んできた試みを論ずる。まず幾つかの具体的な問題を挙げながら、カッパドキアの岩窟聖堂が直面している問題を明らかにする。次いで、近年、現地と同僚やトルコ政府公認ガイド達と模索している文化資源として岩窟聖堂を活用する方法を論じたい。

## 2. 岩窟聖堂の保存・継承における諸問題

カッパドキアはアナトリア高原の中央に位置する。標高は世界遺産に登録されているギョレメ周辺でおおよそ1000～1300m程度である。この辺りの大地はカイセリ南方のエルジェス山 (3916m) とアクサライ南方のハサン山 (3253m) の造山活動によって形成された。まず火山灰が降り積もり、そこに溶岩が流れ込んだ。こうした造山活動を繰り返すうちに下層は軟らかい凝灰岩で、上層は硬い火成岩で構成され、双方の風化と侵食の度合いが異なるため、「妖精の煙突」と呼ばれるキノコ岩が立ち並ぶ奇妙な景観



図1 パシャバーの「妖精の煙突」

が誕生したのである（図1）。カッパドキアは寒暖の差が激しく、夏は8月で優に40度を超え、冬は筆者が体験した限りでは2月で-18度まで下がったことがある。半砂漠とも呼ぶうる景観で喬木は水脈付近のみに見られ、灌木も谷にまばらに茂る程度である。少し歩いてみれば、このように木材に乏しい環境だからこそ人々は軟らかい凝灰岩に洞窟を掘り、暮らすことを選択してきたのだと納得させられる。

凝灰岩の侵食は刻一刻と進んでいる。夏場でも凝灰岩に触れば、砂と化してパラパラと落ちてくる。またカッパドキアは高山帯であり、冬には積雪もある。この積雪が侵食を進行させる主たる要因なのである。雪が降り、水分を含むと凝灰岩は泥のように柔らかくなり、水分を蓄える。これが岩の中で凍って膨張し、凝灰岩層を内側から割って蝕んでいく。侵食の速度は年間にしておおよそ0.4~2.5mmと報告されている（Erguler, 2009, p. 195, table 4）。

例えば、ギョレメ村から6km北にあるゼルヴェ屋外博物館は1950年代まで実際に人が住み暮らす村落だった。村は三叉の谷で構成され、第1谷と第2谷を往来するトンネルも掘られていた。このトンネルは13年前には自由に見学できたが、現在では崩落の危険があるため閉鎖されている。こうした現象は柔らかい凝灰岩に掘られている岩窟聖堂にとっても対岸の火事ではない。トンネルと同じゼルヴェ第2谷のゲイクリ・キリセはイコノクラスム期のフレスコを残す貴重な聖堂だったが（Jerphanion, 1925-1942, t. 1-2, pp. 583-586）、2009年の調査時には崩落により跡形もなく消失していた（図2）。カッ



図2 ゲイクリ・キリセ、8~9世紀、ゼルヴェ（2005年撮影）



図3 カラゲドック・キリセ、10世紀末、ウフララ



図4 メリエマナ・キリセシ、11世紀前半、ギョレメ

パドキア南西部に位置するウフララ溪谷にもまとまった数の聖堂が残存し、こちらも国立公園に指定された史跡である。東西に切り立った断崖の中腹にカッパドキアでは珍しい石造のカラゲドック・キリセ（10世紀末、Jolivet-Lévy, 1991, p. 314）が残っている。こちらの聖堂は2011年に断崖から剥離した巨大な岩塊が直撃し、アプシスが失われた（図3）。現在でもその巨大な岩塊と聖堂の残骸を目にすることができる。世界遺産であるがゆえに比較的手厚い保護を受けているギョレメ地区でも自然的な要因



図5 エル・ナザール・キリセ、10世紀前半、ギョレメ

による損失は進んでいる。例えばギョレメ33番、メリエマナ・キリセシ（11世紀前半、Thierry, 1967b, pp. 117-140）ではヴォールト天井に大きな亀裂が走っており（図4）、この聖堂はたとえトルコ政府文化観光庁から許可を受けていたとしても、安全配慮の観点から現地当局からは立ち入りが厳しく制限されている。

こうした風化と侵食から聖堂の穿たれた岩そのものを救うのは至難の業である。ギョレメ1番、エル・ナザール聖堂（10世紀前半、Jolivet-Lévy, 1991, pp. 83-85）はかつてアプシス南半分が消失し、言うなれば聖堂に穴が空いている状態だったが、UNESCOの支援により消失部を復元し、聖堂の穿たれた「妖精の煙突」そのものも補強工事をされた（図5）。エル・ナザールほど大がかりではないにせよ、ギョレメ地区では擁壁によって補強された聖堂を見かけるが、メンテナンスが行き届かず擁壁そのものが剥落しかけているのも目の当たりにできる。聖堂の穿たれた岩そのものを救う試みはなされているものの、数億円規模の工事になるらしく、現地の博物館職員は常に頭を抱えている。

こうした自然的要因による消失に加えて、人為的な破壊も深刻な問題である。その筆頭に挙げられるのが落書<sup>グラフィティ</sup>である。無論、グラフィティにはモニュメント自体が経験した歴史、例えば巡礼が刻んだ祈念等が記されたものもあり、史料としての価値を持つ場合がある。献堂銘文を欠く聖堂の多いカッパドキアではグラフィティによって制作年代が知られる聖堂も少なくない。しかし、現在もなされている落書のほとんどは歴史的な史料と呼ぶには程遠い代物

である。筆者の見た限り、こうした心無い落書きはギョレメ国立公園のような保護の行き届いていない「マイナーな」観光地に多く見られる。

前述のウフララ渓谷は国立公園であるものの、10kmに及ぶ渓谷に警備員は3箇所しか配置されていない。この渓谷内にある23聖堂は昼夜を問わず野ざらしのままだった。2020年のオリンピック招致でイスタンブールが開催地として名乗りを上げた2011年以来、ウフララ渓谷の観光整備がなされてきている。カッパドキアは先述した通りイスタンブールに次ぐトルコ第二の観光地である。イスタンブールから入国した観光客は「トルコに来たついでに」とギョレメに足を延ばすことが多い。ギョレメに滞在する観光客も数日余裕があれば、現地の旅行会社の催行する絶景のウフララ・ツアーに乗る。現地ガイドによれば、こうした観光客を見込んでウフララは観光整備が進められたらしい。ウフララの岩窟聖堂は70~80mほどの断崖の中腹に穿たれており、かつては崩落してきた巨岩に足をかけつつ登らなくてはならなかったが、現在では階段が整備され、キャプションも新調された。警備態勢も整いつつあり、野ざらしにされていた聖堂にも監視カメラと鉄格子の扉が設置され、閉園時間になると警備員がやってきて扉を閉めていくようになった。その成果もあってか、近年では落書きの被害が減ってきたという。とはいえ、ウフララは幸福なケースである。

ウルギュップ南方40kmにあるソアンルは人口200名ほどの寒村である。この村に至る公共交通機関はなく、筆者が調査を始めた13年前には観光客はほとんどいなかった。ソアンルにはビザンティン時代の岩窟聖堂が8つあり、知る人ぞ知る名作が残存する。ソアンルは村全体が屋外博物館のように機能しており、村の入口で入場料を払えば自由に見学することができる。ここ数年はヨーロッパ人のツアー客が大型バスを連ねて大挙して村を訪れるようになった。こうした観光客以外にも、トルコ人の家族連れや若者の姿も見られるようになってきている。こうした変化の中で年々新たな落書きが増えており、村の最奥部にあるアギア・バルバラ聖堂（1006年、もしくは1021年、Jerphanion, 1925-1942, t.

1-1, pp. 307-332; Restle, 1969, pp. 42-45) の扉口上リュネットに描かれた聖母子像には、最近スプレーで W と大書されてしまった (図6)。ウフララとは異なり、ソアンルは国立公園ではなく、警備員も皆無である。初めて訪れた時には一種のエコミュージアムなのかとも思ったが、村人に岩窟聖堂を保存・継承をしていこうという意識は希薄なようである。日本の観光地でこのような事件が起こればすぐさまニュースになるが、トルコでは口の端にすら上がらない。

グラフィティの他に岩窟聖堂の二次転用という問題も忘れてはならない。岩窟聖堂は様々な形で現在も「使用」されている。オルタ・マハル・キリセ (10世紀中葉、Jolivet-Lévy, 1991, pp. 67-68) はその名の通りギョレメ村の中央に位置する。初めて探し当てた時、筆者は目を疑った。地図が示すその場所には売家があり、牛が繋がれていた。牛の脇を通り抜けるとそこは紛う方なき聖堂であり、廃材が所狭しと置かれていたのである (図7)。ギョレメ3番聖堂 (9世紀中葉、Jerphanion, 1925-1942, t. 1-1, pp. 140-144) も同様の憂き目に遭っている。この聖堂は地図上では開けた場所 (Giovanni, 1971, pl. 4) にあり、筆者は調査を始めた時より探していたが、2013年になってようやく探し当てた。この聖堂は乗馬ツアーの事務所になっており、客にならない限りは発見することは不可能である。さらに各地で住居として転用された岩窟聖堂の話聞くが、こうした場合、撮影はおろか、実見させてもらうことすらできないのが常である。

住居以外に転用された岩窟聖堂の末路は一層悲惨である。ママスン2番聖堂 (10世紀、Jolivet-Lévy, 1991, pp. 291-292) はドームを備えた内接十字式の聖堂であり、テラス状の凝灰岩層の横腹に穿たれている。この聖堂は家畜の飼料用サイロとして使用されている。ドームに穿たれた穴は藁を入れるためのもので、室内には一面に藁が敷き詰められている。さらに藁はドームを支える角柱の上部にまでびっしりと付着しており (図8)、もはや聖人像を同定することもできない。2017年9月にママスンを再調査したところ、聖堂の入口まで藁が詰められて

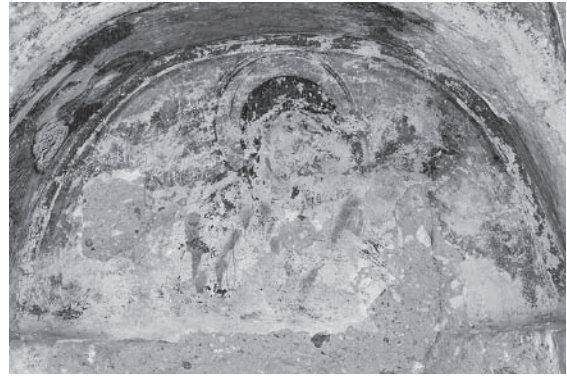


図6 アギア・バルバラ聖堂、1006年、もしくは1021年、ソアンル



図7 オルタ・マハル・キリセ、10世紀中葉、ギョレメ



図8 ママスン2番聖堂、10世紀、ママスンル

おり、室内への立ち入りすらできなかった。村人に尋ねると、藁がなくなる春先にならないと入ることができないとの答えが返ってきた。ギョレメにほど近いゼミ溪谷にあるサルヌッチ・キリセ (11世紀前半) は先述したメリエマナ・キリセと同じ画家 (工房) の作と見られ、カッパドキアでの画家の活動を検討する上で非常に重要な聖堂である (Thierry, 1967b, pp. 117-140)。しかし、この聖堂もその価値に見合った扱いは受けてこなかった。室内は西扉口の「聖霊降臨」が右半分消失し、全壁面ともに床面か

ら1.5mほど壁画が失われている（図9）。というのも、この聖堂の通り名になっている「サルヌッチ」とはトルコ語で貯水池の意であり、事実この聖堂は農業用水を蓄える貯水池として使われていた。ここに貯められた水によって聖堂の壁画が溶けて消失したのである。

現代でもイコノクラスム当時を彷彿とさせるヴァンダリズムが続いている。ソアンル村郊外のバル・キリセ（1051年以前）は全壁面に壁画が残る聖堂であった。例えばジェルファニオンの当时には、アプシスにはプリミティヴながらも二人の大天使を伴う聖母子坐像が描かれ、下方には厳正な正面観の主教立像が配されていた（図10、Jerphanion, 1925-1942, t. 2-1, pp. 250-270, t. 3, pl. 178.1）。しかし、現在は一面に漆喰が塗られ、壁画は薄い漆喰の層からわずかに透けて見える程度である（図11）。ジョリヴェ＝レヴィは、このイコノクラスムは1958年に起こったと報告している（Jolivet-Lévy, 1991, p. 255）。現地ガイドは、このバルクル・キリセは私有地にあり、所有者が聖堂の所在が関係機関に知れば保護のために押収されることを恐れたためにした処置かもしれないと言うが、真偽のほどは定かではない。ギョレメから3km北、ギュリュ・デレ4番、アイヴァル・キリセ（913～920年頃、Thierry, 1965, pp. 97-154）の事例も見ておこう。同聖堂は献堂銘により制作年代が特定できるカッパドキアでも稀有な聖堂であり、壁画の様式的展開を辿る上での基準作例となっている。南堂のヴォールトには「エジプト逃避」の場面が描かれているが、ロバの上に横座りに座る聖母子が四角く切り取られている（図12）。恐らくは正面観の聖母子は礼拝像として切り取られ、闇で取引されたのだろう。こうして失われた美術作品が再び戻ってくることはないに等しい。

以上、本章ではカッパドキアの岩窟聖堂が直面している問題を自然的要因による消失、および人為的要因による破壊という点から垣間見てきた。次章では、これらの問題をいかに解決・改善するかという観点から筆者をはじめとする有志が取り組んできた事例を紹介したい。



図9 サルヌッチ・キリセ、11世紀前半、ギョレメ



図10 バル・キリセ、1051年以前、ソアンル（ジェルファニオン撮影）



図11 バル・キリセ、1051年以前、ソアンル



図12 アイヴァル・キリセ、913～920年、ギュリュ・デレ



### 3. おわりに：岩窟聖堂の文化資源的な活用に向けて

前章では、カッパドキアの岩窟聖堂の保存・継承をめぐる諸問題を概観したが、カッパドキアの岩窟聖堂をめぐる諸問題の根幹には、二極化した保護のあり方に問題があると言えよう。世界遺産に登録され、大勢の観光客を集めているギョレメ屋外博物館とその周辺の一部の聖堂はUNESCOを含めて手厚く保護されてきた。例えばカッパドキアの至宝とも言えるギョレメ7番、トカル・キリセ（旧聖堂10世紀初頭、新聖堂10世紀中葉）は1981年にUNESCOによる大々的な修復が完了し、壁画は見事に蘇った。しかしながら、近年再びイタリア隊が修復を開始し、現在も修復中である。高い経済的な効果が見込まれる聖堂は手厚く保護される一方で、上述のように「僻地」にある聖堂は観光客からも地域住民からもほとんど関心を払われていない。

大局的に見れば、観光業の構造的な欠陥がこの二極化に拍車をかけているとも言える。広告で見かけるトルコ周遊ツアーは長年カッパドキアで調査している筆者の目から見ても極端に安価である。これが可能なのは有名な観光地のみを組み込んでいるだけでなく、業者間でやり取りされるコミッションによるところが大きい。こうしたツアーに参加した観光客からよく聞くのがこの手のツアーが土産物屋周りに近いということである。観光客を土産物屋に連れて行った旅行者やガイドは、アクセサリが売れば売値の何%、絨毯が売れば何%とコミッションを手にすることができる。それゆえ、コストダウンがなされてもツアーが成り立つのである。かつてトルコのガイドをめぐる笑話を耳にしたことがある。イスタンブールの不良ガイドが「はい、ここアヤソフィアです。あっちはブルーモスクです。そんなことどうでもいいから早く絨毯屋に行こう」と言って日本人観光客に殴られるというオチであったが、こうした癒着はジョークにされるほど有名なのである。

さらに言えば、カッパドキアの厚い文化的な基層を蔑ろにし（繰り返すが、カッパドキアはその自然の織りなす景観と遺構の文化的な価値

ゆえに「複合遺産」としてUNESCOに登録されている)、その自然景観のみを「消費」する観光業のあり方にも問題がある。近年流行のサファリ・ツアーはジープで岩窟聖堂の前まで乗り付け、観光客は聖堂内部を一瞥して砂煙を上げつつ去って行く。無論、ガイドによる聖堂の説明は皆無に等しい。こうした観光の方法が聖堂のみならず、長期的な視点で見れば自然環境にとっても有害であることは言うをまたない。ギョレメに限って見ても、こうしたアトラクションが多くが観光業に携わる村人の生活を支えているのもまた事実である。

筆者は2008年に国立ネヴシェヒル大学観光学部の学生に知己を得て以来、彼らとともにカッパドキア中を巡り歩いてきた。現在、彼らはトルコ政府公認のガイドとして活躍しているが、カッパドキアのメインアトラクションは依然として気球ツアーであり、自分たちが学んできたビザンティン時代の岩窟聖堂に関心を持つ観光客は少ないとか、自分たちが岩窟聖堂の魅力を伝えようと懸命に仕事をしている一方で、前述のようないい加減なガイドもいる等々、しばしば現場での不満を耳にする。彼らと話し合い、次のような結論に達した。カッパドキアの岩窟聖堂を保存・継承していくには、まず観光客にその魅力と価値を知ってもらうことが先決である。次いで近年のソーシャルで見られる変化のように「僻地」にある岩窟聖堂にも関心を持ってもらい、地域住民にも文化資源として活用が可能だと知らしめる。それゆえに、観光客に直接的に接するガイドが使命感を持ってカッパドキアにおけるビザンティン美術の魅力と価値を学び、伝えていくことが重要である。

こうした議論を積み重ね、2014年8月以降、カッパドキアで調査をする度にギョレメ村の有志ガイドを中心にセミナーやエクスカージョン・ツアーを実施してきた。講義の内容は様々だが、その都度ガイドの要望にこたえている。例えば、2015年春のセミナーが最も規模が大きく4日に及び、参加者は30人を数えた。セミナーの目的はギリシア語の銘文が読めるようになることであり、まずギリシア語のアルファベットと発音を学び、カッパドキアに見られ

る古書体とその年代を解説した。その後、ギョレメ屋外博物館も含む3日間のエクスカーション・ツアーを行った。現在、ギョレメ屋外博物館では、聖堂内での解説は禁止されており、鑑賞は1グループにつき3分と制限されているが、屋外博物館も管轄するネヴシェヒル博物館館長ムラト・E・ギュルヤズ氏の理解と協力を得て、聖堂内でギリシア語銘文の読み方について講義することができた。

現在ではビザンティンの岩窟聖堂の魅力と価値を世界に発信し、同時に文化財の保存と継承にも有効な構想も議論されている。その一つがヴァーチャル・リアリティー・ミュージアムである。ギョレメ地区だけでも現在までに36の聖堂が報告されているが、一般公開されているのは10聖堂にすぎず、他の聖堂は立ち入りが禁止されているか、野ざらしでも観光客には知られていない。先ほど述べた対策のように、文化財を保護する立場としては観光客の立ち入りを制限する他ない一方で、文化財を観光資源として活用する術を失いたくないという矛盾を抱えている。他方、ガイドにとっても堂内での解説が制限されている以上、岩窟聖堂の魅力と価値を観光客に伝えることは難しい。ここでヴァーチャル・リアリティー・ミュージアムがあれば、現在一般公開されていない聖堂も代替手段によるとはいえ公開できることになり、博物館のコンテンツも増える。さらにヴァーチャル・リアリティー・モデルには、聖堂の形状や規模、壁画の図像や色彩等がほぼ正確に再現されるため、文化財の新たなドキュメンテーションとしても有効であろう(図13)。それゆえ、聖堂そのものが何らかの原因で消失しても、往時の姿を知ることが可能である。こうしたヴァーチャル・リアリティー・モデルを地理情報システム(GIS)上で統合し、図像に関する情報を付与して相互にリンクをすれば、視覚的なデータベースとして学術的な利用も可能になるだろう。こうした研究や活動の成果はいずれ別稿にて報告の機械が持てればと思う。

本稿では、まずカッパドキアの文化資源としての重要性を論じた。この地を訪れる多くの観光客はこの「複合遺産」の文化的な側面を見よ

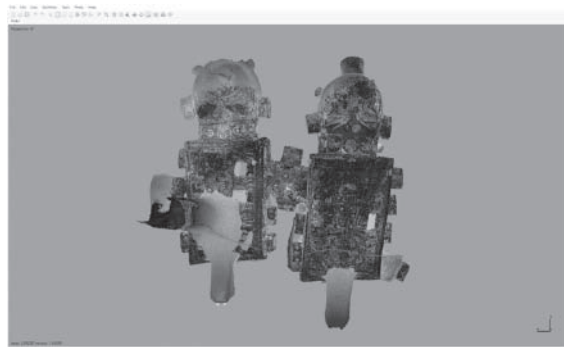


図13 アイヴァル・キリセのヴァーチャル・リアリティー・モデル

うとしない——例え、それが世界史上の一大革命の遠因となっていようと。さらに前章でも詳述したようにカッパドキアの岩窟聖堂は常に、そして今なお自然的・人為的要因により消失・破壊の危機にさらされ続けている。筆者をはじめ、有志はカッパドキアの岩窟聖堂の価値を世界に発信すべく草の根的な「啓蒙」活動を始め、例えモニュメントが失われようと、それらの岩窟聖堂が存在したことを次世代以降に伝える方法を模索している。これらの試みは一朝一夕に実現できるものではない。構想は今まさに始まったばかりである。10年、20年といった長いスパンで考えねばならないだろう。ここまで書いて、学生時代に何の文献であったか読んだ記憶が蘇った。五賢帝の一人ハドリアヌスの演説だったのだろうか。「諸君、煉瓦を一つずつ積んでローマを築こう」。遠い道のりではある。しかし、踏み出す価値はある。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、惜しみなく協力して下さったネヴシェヒル博物館館長ムラト・E・ギュリユズ氏に感謝の意を表したい。またギョレメ村のガイドであるメフメット・ケジェジ氏(ヤマツアー)とバルシュ・シャヒン氏には、これまでの調査の際に聖堂の探索、現地での聞き込みに大いに尽力していただいた。両氏をはじめとする多くのガイドにもこの場を借りて感謝の意を表したい。

## 図版出典

図10 Jerphanion, 1925-1942, t. 3, pl. 178.1.  
上記以外は全て筆者による。

## 参考文献

- 高晟峻 2003 「カッパドキア岩窟修道院聖堂アーチ・アルトゥ・キリセシの装飾プログラム」『美術史』第154号第2分冊、243-255ページ。
- 菅原裕文、益田朋幸 2012 「カッパドキア円柱式聖堂群の装飾プログラムと制作順」『美術史研究』第50号、45-79ページ。
- 菅原裕文 2016 「図像・空間・儀式 — カッパドキア、ギョレメ、チャルクル・キリセ」益田朋幸編『聖堂の小宇宙』115-136ページ、竹林舎、東京。
- Cave, J. A. 1984. *The Byzantine Wall Paintings of Kılıçlar Kilise: Aspects of Monumental Decoration in Cappadocia*, Pennsylvania State University, Ph.D. diss.
- Cormack, R. 1967. "Byzantine Cappadocia: the Archaic Group of Wall-Paintings," *JBAA* 30, pp. 19-36.
- Epstein, A. W. 1980-1981. "The Fresco Decoration of the Column Churches, Göreme Valley, Cappadocia: Consideration of Their Chronology and Their Models," *CaihArch* 29, pp. 27-45.
- Epstein, A. W. 1986. *Tokalı Kilise: Tenth-century Metropolitan Art in Byzantine Cappadocia*, Washington, D. C., 1986.
- Erguler, Z. A. 2009. "Field-based experimental determination of the weathering rates of the Cappadocian tuffs," *Engineering Geology* 105, 186-199.
- Giovanni, L. (ed). 1971. *L. Arts de Cappadoce*, Genève/Paris/Munich, 1971.
- Grishin, A. D. 1989. "Constantinople and Cappadocia in the Eleventh Century: Centre and Periphery," *World Art, Themes of Unity in Diversity: Acts of the XXVIth International Congress of the History of Art*, edited by Lavin, I., vol. 1, Pennsylvania, 1989, pp. 81-85.
- Jerphanion, G. de. 1925-1942, *Une nouvelle province de l'art byzantin : les églises rupestres de Cappadoce*, 4 vols., Paris.
- Jolivet-Lévy, C. 1991. *Les églises byzantines de Cappadoce: le programme iconographique de l'abside et de ses abords*, Paris.
- Jolivet-Lévy, C. 2015. *La Cappadoce: un siècle après G. de Jerphanion*, 2 vols., Paris.
- Kostov, S. 1989. *Caves of God: Cappadocia and its Churches*, New York/ Oxford.
- Lafontaine, J. 1958. "Note sur un voyage en Cappadoce (Été 1959)," *Byzantion* 28, pp. 465-477.
- Lafontaine-Dosogne, J. 1963. "Nouvelle note cappadociennes," *Byzantion* 33, pp. 121-183.
- Lafontaine-Dosogne, J. 1987. *Histoire de l'art byzantin et chrétien d'Orient*, Louvain-la-Neuve.
- Mango, C. 1978. *Byzantine Architecture*, Milan.
- Ousterhout, R. G. 2017. *Visualizing Community: Art, Material Culture and Settlement in Byzantine Cappadocia*, Washington D. C.
- Restle, M. 1969. *Byzantine Wall Painting in Asia Minor*, 3 vols., Greenwich.
- Rodley, L. 1985. *Cave Monasteries of Byzantine Cappadocia*, Cambridge.
- Teteriatnikov, N. B. 1996. *The Liturgical Planning of Byzantine Churches in Cappadocia*, Rome.
- Thierry, N. 1963. *Nouvelles églises rupestres de Cappadoce: region du Hasan Dağı*, Paris, 1963.
- Thierry, N. and M. 1965. "Ayvalı kilise ou Pigeonnier de Güllü Dere église inédite de Cappadoce," *CaihArch* 15, pp. 97-154.
- Thierry, N. and M. 1967a. "Étude stylistique des peintures de Karabaş kilise en Cappadoce," *CaihArch* 17, 161-175.
- Thierry, N. 1967b. "Un atelier cappadocien de XIe

siècle à Maçan-Göreme," *CaihArch* 44, pp. 117-140.

Thierry, N. 1983-1994. *Haut Moyen-Âge en Cappadoce*, 2 vols., Paris.

Thierry, N. 1995. "De la datation des églises de Cappadoce," *BZ* 88, pp. 419-455.

Wallace, S.-A. 1991. *Byzantine Cappadocia: The Planning and Function of Its Ecclesiastical Structure*, Ph.D. diss, Canberra, Australia National University.

Wharton, A. J. (ed. Epstein) 1987. *Art of Empire: Painting and Architecture of the Byzantine Periphery: A Comparative Study of Four Provinces*, Pennsylvania.